

計画研究 B02「越境的非国家ネットワーク：紛争と国家破綻」海外調査報告

(B02 研究協力者・円城由美子：英国・ロンドン出張 [2016年9月8～15日])

文責：円城由美子（立命館大学・博士後期課程）

戦後イラクの国家再建における女性の役割・諸問題に関する情報収集を目的として9月8日から15日まで調査でロンドンを訪れた。ロンドン大学 SOAS の中東における女性の状況に詳しいナジャ・アル＝アリ(Nadje Al-Ali)教授へのインタビューほか、イラク出身者とのコンタクト、SOAS 図書館における文献調査および中東専門書店（アラビア語）を含む市内書店での書籍収集を行った。

以下、女性の視点からイラク戦争後のイラクの状況についての意見交換を行ったアル＝アリ教授とのやりとりを簡単に振り返りたい。

アル＝アリ教授は中東女性の社会的地位や活動に詳しく、イラク戦争後のイラクに関する論考も複数執筆している。米国の民主化プログラムの実施状況を確認するために占領統治下のバグダードに入って調査を行い、紛争中・後のイラクの状況を生で体感した貴重な体験を持つ。その体験を語った上で女性に関する状況を理解する上での留意点を示してくれた。

現地での体験について教授は、紛争による影響の負担は誰もが同等に受けるのではなく、女性が偏って大きな影響を受けると説明し、紛争と結び付けて女性の置かれた環境および女性の活動に注意を払う意義を強調した。その上で現地での調査ではこのことを身をもって感じた述べた。また、女性を分析対象に取り上げる際には、居住地や年齢、社会経済的な特性によって、経済・社会・政治的に受ける影響も、新たな社会情勢に対する受容や対応も大きく異なっていることに注目すべきとも付け加えた。

さらに、暴力抗争と女性への攻撃の関係性については、宗派を基にした集団同士の暴力対立が続く中で、集団間の対立構造は変わっても、常に女性がどの集団からも攻撃対象とされているのではないかと、その筆者的質問に対して、そのことを認めた上で、帰属している宗派集団の中では戒律を守らなければ攻撃されるリスクを担い、敵対する集団からは女性という理由だけでも攻撃されるリスクがあると説明した。

民主主義の導入によってイラク人による NGO 活動が期待されたが、米国とのつながりが深い NGO に比べてイラク人自身が主体的に運営する NGO 組織の活動は必ずしも広がっておらず、組織の規模の拡大も限定的なものとなる傾向が見られた。その最大の理由として同教授が指摘したのは、NGO 活動の経験不足だった。組織作りも資金運営も経験がなく、「意欲と熱意だけで進もうとした、naïve すぎた」と分析している。「現在イラク人女性たちは組織運営のスキルを学びつつあり、今後女性支援を含めた NGO 組織の活動は徐々にではあ

れ今後広がってゆくのでは」との見通しを示した。

現在のイラクの状況と米国占領統治政策との関係については、占領統治開始後の数年間の混乱は米国の政策の誤りを非難することが妥当であると認めつつ、現状については「イラクの政治家たちに大いに責任がある。主に腐敗。もはや、米国の責任とは言えない」との認識を示した。IS についても IS の発生自体に米国の関与は否定できないまでも、その後の展開はイラク政府に問題があると語った。

約 1 時間のインタビューでは、女性に関する文化的な知識や配慮の欠如など、占領統治当初の米国には批判的だったが、最終的にはイラク人自身への批判を込めた激励のような内容へと移っていった。「国家建設は結局イラク人自身で進めるほかなく、女性の地位向上も含めてイラク人自らの力で切り開くしかない。それには時間がかかる」と締めくくっていたのが印象的だった。人類学者リラ・アブ・ルゴッド Lila Abu-Lughod コロンビア大教授による著書 *Do Muslim Women Need Saving?* でも同様の見方が示されている。アル＝アリ教授には、海外出張から帰国直後の SOAS での講演の合間を縫って、インタビューに時間を割いてくださったことに心から感謝したい。